

映画撮影

2017

No.212

撮影報告

村山宇宙論

新陰流 上泉伊勢守秀綱

14の夜

BE FREE!

サバイバルファミリー

いのちのかたち



洋画の話題

マリアンヌ

撮影報告
SHOOTING REPORT

Share the Earth, Happiness and Freedom

BE FREE!

原爆の残り火を、パレスチナへ

アースキャラバン2015

監督・撮影・編集

鈴木 聡

SUZUKI SATOSHI



原爆の残り火とともに歩む 40 日間の世界巡礼の旅。この旅を作品にしようと初めて自らカメラを回し、映画を監督した。普段は、広告代理店で広告制作をしている。

なぜ、普通の会社員が、パレスチナまで行ってカメラを回したのか？

僕は、仕事とは別に、プライベートでタオ指圧という指圧を学んでいる。

タオ指圧は、浄土宗の僧侶・遠藤暁及さんが四半世紀にわたる経絡研究や、武道による氣の修練、僧侶としての仏教修行の末、体系付けた指圧だ。

2013 年に、世界中の門下生が集まるタオ指圧の世界大会がタイで行われた。その最終日、暁及さんが、「来年は戦後 70 年の節目の年、日本からヨーロッパを経て中東まで戦傷地を巡礼しよう」と発案した。それが、世界平和イベント・アースキャラバンの始まりだった。

様々な職業を持つ世界中の門下生が一丸となつてのアースキャラバン実現のための怒涛の日々が始まった。「憎しみの火」から「平和の火」へと昇華した「原爆の残り火」をシンボルにす

ることも決めた。

僕たちには、一つの思いがあった。「国籍や人種や宗教が違っていても、平和であってほしいという願いは同じはず。原爆の残り火に触れて、平和への願いをシェアし合えば、きっとみんな分かり合える。戦争なんてなくなる」と。

賛同者もどんどん増えていった。原爆の残り火を携え走るピースサイクリングに、俳優の鶴見辰吾さんが参加、音楽家の原田真二さんがステージ演奏で参加、俳優の吉永小百合さんも賛同者に。気づいたら、門下生だけでなく、世界中の人を巻き込んでのイベントに成長していった。

アースキャラバンが始まる 2 週間ぐらい前だろうか、これは記録として残さなければいけないのでは？ と直感した。しかし、プロを雇うお金もなく、ええい、自分で撮ってやれ！ と電器店に走り、撮影機材一式を購入したのだ。

被爆二世の意外な言葉で本気になる

初めての撮影は、福岡県星野村で燃え続けている原爆の残り火（平和の火）の採火式。

被爆二世の梶川純司さんに、平和の火を見て

どう思うか質問した。しかし「簡単に平和の火とは思えない」という予想外の答え。「憎い」「怒り」といった感情が湧いてくると言う。

正直言うと、平和活動なんて、綺麗事かもしれないという気持ちが心のどこかにあった。

だから、「憎い」「悔しい」「でもそれじゃいけない」「何とかこの火を『平和』のために使えないか」そんな葛藤に、綺麗事ではない人間の本気を感じた。僕の中で、ただ「記録を残そう」から、「もっと知りたい」という本気に変わった瞬間だった。

恐怖で足がすくんで広島の地に戻れず、70年ぶりに広島に帰ってきたという被爆者。

火を見た瞬間、憎しみで、この火を消したい衝動に駆られたのをぐっと我慢した被爆者。

アースキャラバン広島・京都・東京と、原爆の残り火が生み出すドラマに、どんどん引き込まれていった。

敵という幻想

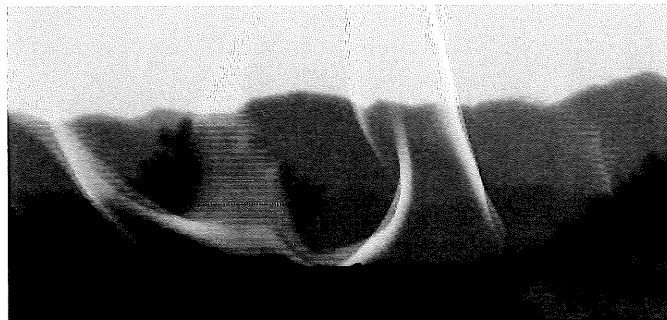
そもそも、なぜ人は、戦争で人を殺すことができるようになるのだろうか？

アースキャラバン東京で出会った元イスラエル空軍兵士ダニー・ネフセタイさんの話が印象的だった。国のためなら、人を殺してもいいと、思っていたと言う。国家によって洗脳されていた。イスラエル人は、アラブ人は悪魔だと教わり育つそうだ。そして、戦争で国のために死ぬのは、素晴らしいと。

しかし、他国のことだと笑うことはできない。長崎で被爆した田中熙巳さんも、アメリカ兵を殺そうと思っていたと語ってくれた。

歴史学者のアンヌ・モレリによると、すべての戦争は、国家による全く同じプロパガンダで始まると言う。「我々は戦争をしたくない。しかし、敵が望んでいる。敵の指導者は悪魔のような人間だ」

ダニーさんも田中さんも、裏には、戦争で儲かる政治家と、軍産共同体がいる、と断言した。



原爆の残り火

人間は、国籍や人種や宗教の壁を 超えられるのか？

海を渡った原爆の残り火は、4カ国（オーストリア、ドイツ、チェコ、ポーランド）・6都市を巡った。

オーストリアの女性は、火を見ただけで泣き出し、平和への思いを語り始めた。

ドイツの老婦人は、火を見て「身震いがする」と言った。そして、ヒットラーに抵抗して国外に脱出した父親の話を語り始めた。

また、別の老婦人は、戦争が原因で自殺した二人の兄弟の話を始めた。そして、「自分の家族だけが、こういう経験をしたのではない。たくさんの家族が今もそれを抱えて生きているのです」と語った。

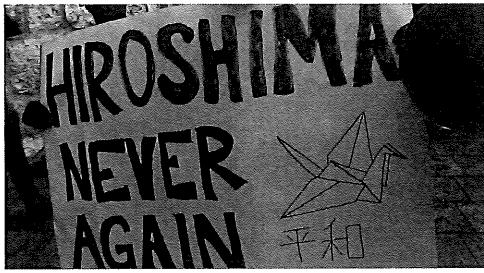
みな原爆の残り火によって、心の奥の痛みが照らされたようだった。

世界中の人々が同じ痛みを抱えている。僕たちは、「痛み」を共有することで一つに繋がることができるのだと思った。

異なる宗教を信仰する人々にも、原爆の残り火を見せ、異宗教者が平和的に共存するために何が必要か尋ねた。「相手を理解すること」「相手を愛すること」異なる宗教を信仰する人が、同じことを口にした。

国籍や人種や宗教が違っていても、人と人の間に橋を架けられる。しかし、そうではない方向に走ってしまった歴史が、アウシュビッツ強制収容所だ。僕たちは、収容所も巡礼した。

収容所には、ユダヤ人だけでなく、同性愛者や精神病患者もいた。ナチスドイツは、こういった人々を社会的な「敵」と見なした。今でこそ、同性愛者が敵だなんて考えは馬鹿らしく思



えるが、人間には、特定の人間の集団をカテゴリー化して、敵と見なすカルマがあるのを忘れてはならない。

敵など本当は存在しない。誰かを「敵」と見なした瞬間、「敵」になるのだ。逆に言うと、「仲間」だと思えば、「仲間」になるのだ。

本当の「敵」は、外にはいない。「敵」を作る自分の心の中に「敵」は存在する。

マスコミが伝えないパレスチナの実状

いよいよ、原爆の残り火と共に、中東へ。

67年間も紛争がつづくイスラエル・パレスチナへは結構悲壮な覚悟で向かった。だから、パレスチナ自治区のベツレヘムに到着した時、拍子抜けしてしまった。何がって、あまりの平和さに。お祭りの準備で、大人はみな浮き足立っていて、子どもたちははしゃいでいる。日本の夏祭りとは変わらない風景だ。

そして、パレードが始まった。子どもたちがプラカードを掲げている。「未来のために核兵器廃絶」「ヒロシマを二度と繰り返さないで」

原爆の残り火が来ると知って、自主的に作ってくれていたのだ。

マスコミ報道は、「パレスチナ人によるテロの報復として、イスラエルがパレスチナのガザを攻撃しました」といったものばかりなので、「パレスチナ人＝テロリスト」というイメージが刷り込まれていた。

しかし、インタビューをすると、誰よりも平和を望んでいて、日本人より国際感覚も豊かだ。

僕の中では、憎しみの連鎖で戦争がやめられないパレスチナの人々が、原爆の残り火に触れ、憎しみから脱却し、平和を求めてくれたらなあぐらいに思っていたのだが、見当違いも甚だしかった。

命を、土地を、尊厳を、 奪われ続けるパレスチナ人

「イスラエル・パレスチナ紛争」という言葉から、2国間の対立というイメージがないだろうか？ しかし、それは違った。パレスチナの土地をイスラエル軍の車が走り、いたるところにイスラエル軍の監視塔、検問所がある。対立ではなく、明らかにイスラエルによる占領だ。(そもそもパレスチナは国としてまだ認められてすらいない)

パレスチナ自治区のヘブロンという街に行った。イスラエル軍兵士が闊歩していて、モスクに行くにもイスラエル軍の検問所を通らなければならない。

僕たちが滞在した直後、ヘブロンで、18歳の少女が銃殺された。すぐに荷物の中身を見せなかったという理由だけで、10発も銃弾を浴びせられて。パレスチナ人は、イスラエル軍に虫ケラのように殺されているのだ。

検問所は撮影禁止だったが、何がなんでもこの実態を映像に収めなければと、カメラを回した。イスラエル兵にもカメラを向けた。もし、カメラが銃に勘違いされたら、撃たれるかもしれない。そう思うとカメラを持つ手が震えた。

パレスチナ人に「平和」を教わる、 恥ずかしい日本人

イスラエル軍によって村から追い出され、砂漠のテント生活を30年以上も続けているシヤの人々。

イスラエル軍のブルドーザーで家を破壊される、建て直す、を7回も繰り返している家族。

命のように大事なオリーブの木を、嫌がらせで1500本も切られた農場の主人。

あまりの境遇に言葉を失うしかない。しかし、彼らに共通していることがある。それは、「非暴力による抵抗」と「不屈の精神」だ。

農場のダウードさんの言葉が強く印象に残った。「私たちはイスラエル人もウエルカムです。嫌悪は人を殺すことになります。作り出すこと。他の人を非難しないで、立ち上がって何かをすること。自分に勇気が湧くし、他の人も勇気付けられます」



僕たちは、戦争ばかりしていると思っていたパレスチナ人から平和の作り方について教わったのだ。

パレスチナの2、3歳の子どもとも遊んだ。カメラが珍しいらしく、液晶に映った自分の顔を見てずっと大笑いしている。その子を見ているうちに涙が出てきた。

2014年、日本は、武器輸出を可能にした。イスラエルと無人兵器の共同開発まで進めている。今度、パレスチナへ攻撃があったとしたら、日本の作った武器で、この子たちが殺されるかもしれないのだ。

誰よりも平和を愛する日本人だと思っていたが、誰よりも金を愛し、金のためなら他人が殺される武器を輸出しても構わない日本人に成り下がっていたことに、この時ようやく気づいた。

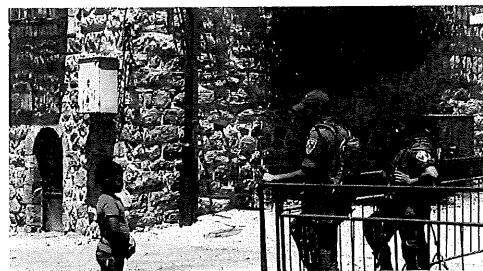
イスラエル人が悪魔なのか？ それは違うと僕は思う。

イスラエル側にも行った。イスラエル女性から自主制作映画を見せられた。「イスラエルの子どもが『ロケット弾を撃たないで』と書いた風船をガザ地区に飛ばす」という内容だった。彼女は、イスラエル人は被害者だと主張した。

しかし、前年のガザ侵攻によるパレスチナ人死者 2251 人。片やイスラエル人死者 73 人。パレスチナ人を分離壁の中に閉じ込め、そこを空爆して、何が被害者だと抗議したかった。

僕はダニーさんの言葉を思い出していた。「国家によって洗脳されている」

しかし、イスラエル人の中にも、国家の洗脳から目覚め、平和活動をしている人がいた。パレスチナ人の家を破壊しようとするイスラエル軍のブルドーザーの前に、立ちはだかるイスラエル人の存在を知った時には、希望はある、と



確信した。

戦争がなくならないのは、 「自分のせい」だった

強制収容所のナチス兵の家は、収容所のすぐ隣にあって、収容所でどんなひどいことをしても、家に帰り、家族と普通に暮らしていたそう。ユダヤ人迫害に疑問を持っていたナチス兵もいたはずだ。しかし、命令に背いたら処罰され自分の生活が維持できなくなる。だから、ナチス兵は、収容されているユダヤ人を「見捨てて」、平然と普通の生活を自分の家族と送っていたのだと思う。

パレスチナ人は、分離壁に囲まれ、言ってみれば収容所の中にいるわけだ。そんなパレスチナ人を「見捨てて」、ただの傍観者でいるとすれば、僕は、ナチス兵と何も変わらないのではないか。

地球に平和が訪れず、世界中の人すべてに幸福と自由が訪れないのは、政治や他国のせいにして、紛争や貧困で困っている人を助ける努力もせず「見捨てている自分のせい」なのではないか？「見捨てている人」の集合体が世界なのだから、みな「見捨てない自分」にならない限り、世界に平和は訪れないのではないか？

そう、世界に平和が訪れないのは、「自分のせい」だった。それが、今回のアースキャラバン 40 日間の巡礼の旅で得た結論だ。

だから、僕は必死に映画を作った。映像関係の仕事仲間や、たくさんの人たちが無償で協力してくれた。僕は、世界の平和と人々の幸せに責任を持つことを決めた。

撮影機材：Canon iVIS HF G20
Canon EOS 7D など